

〔研究ノート〕

ババッド・タナ・ジャウイ研究序説

深 見 純 生

『人間文化研究』第10号抜刷

2019年2月28日発行 桃山学院大学総合研究所

〔研究ノート〕

ババッド・タナ・ジャウイ研究序説

深見純生

はじめに

筆者は先にメインスマ版のババッド・タナ・ジャウイ (Babad Tanah Jawi, 以下 BTJ と略記する) の翻訳を10回に分けて発表した (深見訳 2012)。本稿はその際に分載した解題に新たな知見を加え、誤りを訂正するとともに、全体をより一貫性のあるものに編集したものである。翻訳はラスによるメインスマ版第5版 (Ras 1987a) (第2節第4項参照) を底本とし、この解題もまたラスの解説 (Ras 1987b) に多くを拠っている。したがって国際的なジャワ学の水準からすると新しいことは多くない。しかしながら日本では BTJ の名は知られていても、書誌的事項はこれまでじゅうぶん紹介されておらず、ジャワ語原文からの翻訳とこの解題は国際水準に追いつくための努力として意味があるだろう。これによってわが国におけるジャワやインドネシアの同様の史伝との比較研究にとどまらず、東南アジアにおける同様の文献の研究とそれに基づく歴史の研究のために役立つことを期待したい。本稿はまた筆者にとって、オランダで独自の発展をみせたジャワ学 (Javanology) の歴史への接近の第一歩でもある。

以下、第1節で BTJ の概要を簡単に紹介し、第2節で国際的に最もよ

キーワード：ババッド・タナ・ジャウイ、ジャワ、マタラム、スラカルタ、
史伝

く普及したメインスマ版の刊行に至る事情とその重版について述べる。第3節では真正性の高いバライプスタカ版について、とくにその底本について検討する。第4節では、宮廷詩人やサディプラ2世が1836年に完成させたBTJ（大ババッドと通称される）と総体的に同じ物語展開をみせる作品群の概要を紹介し、第5章ではそのグループのうち大ババッド、バライプスタカ版、メインスマ版の構成についてとくに叙述の終りと量的な側面を取りあげる。

本論の後に「天女ナワンウランのその後」と「いとこ婚」の2つの付説を述べる。前者はBTJと民間伝承の関係に関わるものであり、後者はBTJから読みとりうる国家論のひとつの手がかりである。

1. ババッド・タナ・ジャウイ

(1) ババッド

ババッド (babad) はイスラム時代のジャワにおける史伝のことである。英語では history あるいは chronicle の語があてられる [Robson 2002: 62]。特定の歴史的出来事や個人の伝記のこともあるが、王国あるいは王家の史伝にババッドを称するものが多い。ババッドの語に「(森を) 開く」の意味もあり、史伝の作成と国を建てることの間にある不可分の関係を示唆するとされる。ただし王国や王家の史伝がすべてババッドを称するわけではなく、スラット (Serat, 書物) やスジャラ (Sejarah, 系譜, 歴史) などと称するものもある。ついでながら、ムラユ語圏ではヒカヤット (Hikayat, 史伝) を冠するものが多い。

ババッド作成の起源ははっきりしないが、17世紀前半には祖型と見なしうるものが存在したといわれ、アラブなど外来の歴史伝統の受容によるものではなく、『パララトン (Pararaton)』¹⁾ などジャワの文化伝統に根ざすものと考えられている。

ババッド・タナ・ジャウイ研究序説

ババッドの内容は大きく2層に分かれる。第1層は神話伝説である。神々、精霊、悪魔、武人たちの伝説に満ちている。預言者アダム (nabi Adam) に始まり、インドの神々やジャワの開闢へと続くこともめずらしくない。イスラム時代以前の諸王国が語られることも多い。その内容は近代的な歴史学の成果とほとんど接点をもたないが、ジャワがおかれていた一般的な事情について、またババッドが語られた当時の歴史観や世界観を知る手がかりとしては重要である。

第2層は17世紀以後の歴史的出来事である。特定の王、王国、英雄、あるいは一連の出来事を中心とする語りである。歴史研究者は他の諸史料(とくにオランダ語の文書)と突き合わせることで、これらの史料としての有効性を証明してきた。たとえば、1740年代の動乱の時代について我々はレメリンク (Rommelink 1994)、リックレフス (Ricklefs 1998)、アミヌッディン (Aminuddin 2003) というすぐれた3つの研究をもっている。こうした研究において、他の諸史料と同じく、ババッド類が作成された社会的、文化的、また政治的な背景への十分な配慮が必要なのは言うまでもない。なかでもリックレフスは文化的背景に重点を置いた研究である(深見 2003a 参照)。

(2) ババッド・タナ・ジャウイ

1570年代に興った²⁾ マタラム王国の史伝である BTJ はまさにこの2層からなり、預言者アダムから18世紀の出来事までが語られている。この2層は画然と区分されるわけではなく、大雑把な印象としては、第5部ババッド・マタラム (Mataram, 38-74章) においてゆるやかに遷移している。

BTJは王都の移動にしたがって7部に区分され、これらもまた各々ババッドを冠して呼ばれることがある。第1部ババッド・パジャジャラン (Pajajaran, 1-4章)、第2部ババッド・マジャパイト (Majapait, 5-14章)、第3部ババッド・ドゥマック (Demak, 15-23章)、第4部ババッド

ド・パジャン (Pajang, 24-37章) などである (第5節第1項参照)。それぞれ王都あるいは王国の崩壊までを扱うのは、ブランデスおよびラスによれば、ジャワの伝統に従うものであり、こうしたババッド・パジャジャランなどババッドを冠する題目は、書名として扱うのも可能であるが、本来は書物のタイトルというより、内容あるいは時代を大まかに示す標目である [Brandes 1920: 205-206; Ras 1987b: XXVII-XXVIII]。

なお、パジャジャランは、現在一般的なジャワやインドネシアの歴史叙述ではマジャパイトと並立する西部ジャワの王国であるが、BTJではマジャパイトに先行する王国とされている。

BTJはもともと宮廷詩人が朗詠するものであり、王と王家の正統性を謳う機能をもつものであった。18-19世紀のジャワの宮廷とその周辺で書き留められ、書き継がれた。現存する写本は古くて18世紀のものである (第4節参照)。

メインスマ版の原文には一見してわかるような明瞭な区切りは存在せず、したがって章の番号も題目も存在しない。バライプスタカ版でも本文自体には韻律の変わり目以外の区切りはみられず、章の番号や題目は存在しない。メインスマ版は全124章からなるが、この区分と各章の題目はバライプスタカ版を踏襲している。すなわちバライプスタカ版の編集者が全体を192章に区分し、各々に題目をつけたのである。ラスがメインスマ版第5版の解説の中で、124章の題目とバライプスタカ版詩章詩節の対応関係を示している [Ras 1987b: LV-LXIII]。なお、このことからわかるように、メインスマ版とバライプスタカ版は、BTJの多数存在するバージョンのなかで、同一系統のテキストに属する。その中心にあるテキストは大ババッド (Grote Babad / Major Babad) と通称される [Ras 1987b: XIV-XIX] (第4節参照)。

2. メインスマ版

(1) メインスマとロールダ

BTJは本来マタラム宮廷で謳われた韻文である。また多数のバージョンがある。そのなかで数少ない散文版のひとつがメインスマ版である。そこには次のような事情があった。

メインスマ版と通称されるが、メインスマ (Johannes Jacobus Meinsma, 1833-86) は著者ではなく、刊行者である。彼は1853年レイデン大学に入学して神学を学び、1858年には聖職候補者に登録された。しかし聖職には就かず、ジャワ語を学習し、1861年デルフトの王立アカデミー (Koninklijke Akademie te Delft) のジャワ語講師に就任した。1864年アカデミーは廃止され東インド学の講座はレイデン大学に移管されたが、メインスマはデルフトに同時に設立された市立東インド官吏養成学校 (gemeentelijke instelling voor de opleiding van Indische ambtenaren te Delft) の教師となりジャワ語および東インドの地理民族学を担当した。1868年からは東インドの歴史も担当し、1870年から校長を勤め、晩年にはマドゥラ語も教えた。BTJの刊行以外にもジャワ語の辞書などジャワ学および東インド学の業績を多数発表している [ENI 2: 694-5]。

デルフトの王立アカデミーは1842年に民間人技術者の養成のために設立された高等教育機関であるが、翌1843年にオランダ領東インドの植民地官吏の養成のための課程が設置された。この東インド課程は、その設立を提唱し設置とともにジャワ語の教授に就任したロールダ (Taco Roorda, 1801-74) の強力な指導力のもとで、ジャワ語とジャワ文学、ジャワ文化の研究教育の中心に発展していった [Kern 1928: 211; ENI 3: 635-6]。

ロールダは当初セム系諸言語を学び、フローニンゲン大学で神学博士 (1824)、レイデン大学で文学哲学名誉博士 (1825) となった。アムステル

ダムのアテネウムの教授を勤め、ヘブライ語（1831-33）やアラビア語（1835）の文法書を刊行した。しかし1830年代半ばからジャワ語・ジャワ学の研究に従事し、1839年にはジャワ文字の活字を作っている。1843年王立アカデミーのジャワ語教授に就任し、ジャワ学・東インド学の発展に尽くした。1864年王立アカデミーの廃止と東インド学講座のレイデン大学への移管とともに、彼はその東インド言語地理民族学の初代教授（1864-74）となった。このようにロールダはジャワ学の初期の中心人物であり、自身ジャワ語文法（1855）、ワヤン物語の研究（1869）、ジャワ語・オランダ語辞書（1901定本）はじめ多くの業績をあげるとともに、多くの後進を育てた〔Kern 1928: 208-216; ENI 3: 635-6〕。

ロールダの薫陶を受けた一人がメインスマだったのだが、彼がBTJ（初版 1874-77）を刊行したのは、ジャワ語（およびジャワの文化や価値観）の学習のための教材としてであり、散文であった理由はここにある。第3版（1903）までジャワ文字で刊行され、ジャワ語の教育におおいに利用され、「ババッド・メインスマ」と通称されたという〔Ras 1987b: X〕。

現地調査・臨地研究が常態化した現在では信じがたいことかもしれないが、ロールダもメインスマもジャワ現地を踏んでいないらしい。したがって、ジャワから十分な資料の提供なくしては19世紀半ば以降のオランダにおけるジャワ学の発展はありえなかったであろう。メインスマ版の原文もジャワ現地からのこうした寄与のひとつであった。

(2) ウィンテル

メインスマ版の原稿をオランダに提供したのは「デルフトのアカデミーにとってジャワ語の栄養源」〔ENI 4: 786〕と称されたウィンテル（Carel Frederik Winter, 1799-1859）であった。ここで主に『オランダ領東インド百科事典』の項目「ウィンテル」〔ENI 4: 786-7〕に依拠して簡単に紹介しておきたい。

ウィンテルはジャワ語翻訳官 (translateur in de Javaansche taal) の子として中部ジャワ南部の王都ジョクジャカルタに生まれ、1806年父 (Johannes Wilhelmus Winter) の転勤によりもうひとつの王都スラカルタに移った。父の教えを受けて自らもジャワ語に通暁するようになり、イギリス中間統治期 (1811-16) をへて、1818年にはジャワ語翻訳官補に任じられた。翌年父は中部ジャワにおけるオランダ統治の中心地である北岸のスマランに転勤になったが、彼はスラカルタでジャワ語の仕事を続け、1825年にジャワ語翻訳官に任命され、同時に公証人 (notaris) の職務も命じられた。ちょうどジャワ戦争 (ディボヌゴロの反乱, 1825-30) がジョクジャカルタ王国だけでなくスラカルタ王国も巻き込んでジャワ社会に大きな混乱と荒廃をもたらす時期にあたる。

さしもの大動乱も治まった後、総督ファン・デン・ボス (Johannes van den Bosch, 1780-1844; 総督 1830-34, 植民地大臣 1834-40) の下で1832年、スラカルタにジャワ語学館 (Instituut voor de Javaansche taal) が開設されると、ウィンテルは業務のかたわらここでジャワ語を教え、後に館長も務めた [Ras 1987a: V]。ジャワ語学館の設置目的は「ジャワ語に通暁し、ジャワ人の高官および下層の人と交際することができ、彼らの考えを彼らの言葉で表現し、また書き表すことができる」人材を養成することであった。

ジャワ語学館は1843年デルフトの王立アカデミーに東インド学課程が設置された時に廃止された。ジャワ語教育の場がジャワ現地からオランダ本国に移ったのであるが、これ以後ウィンテルのジャワ語とジャワの社会、風俗習慣、文化に関する深い知識がますます注目されるようになった。彼は自ら進んでまたローラダ教授の求めに応じて、様々な論著をジャワ語で書き、あるいはジャワ語からオランダ語に翻訳しデルフトに提供した。「ジャワ語の栄養源」と称される所以だが、こうして彼が提供したものの

中にメインスマ版の原稿も含まれていた。ウィンテルがデルフトに提供した資料は、1864年に東インド学課程のレイデン大学への移動にともなってレイデン大学図書館に移管され、同図書館ではこれらジャワ語の写本はデルフト・コレクションと呼ばれている [Pigeaud 1967 1: 165-6; 2: 6-8]。メインスマ版もレイデン大学図書館所蔵の原本によって刊行された [Ras 1987a: V]。

1844年には政府の正式決定によりウィルケンス (Johannes Albertus Wilkens, 1813-88) [ENI 4: 782-3] と共同で詳細なジャワ語・オランダ語辞書の編纂を命じられたが、ウィンテルの本来業務の多忙などの原因でその存命中には完成しなかった。ウィルケンスはウィンテルのスラカルタにおける最も優秀な学生であった [Uhlenbeck 1964: 50]。ウィルケンスは1848-51年の約3年をロールダに協力するためにオランダで過ごしているが、ウィンテルは1859年スラカルタで死去するまでオランダに行ったことはないらしい。なお、彼の息子2人 (F. W. Winter; C. F. Winter Jr.) そして孫1人 (F. L. Winter) もジャワ語専門家の道に進んでいる。

(3) クルタプラジャ

ウィンテルがデルフトに提供した「栄養」の中にメインスマ版の原稿が含まれていたのだが、その筆者はウィンテル自身ではなくクルタプラジャ (Raden Ngabehi Kertapraja またはカルタプラジャ Kartapraja / Karta Praja) であった。クルタプラジャに関しては生没年など基本的な事柄を含めて詳細は明らかでない。以下にわかった限りのことを紹介しておきたい。特に注記するもの以外はラスに拠っている [Ras 1987b: X-XI]。

クルタプラジャは1838年4月にジャワ語学館の教員に任命された。給与月額50ギルダーという [Wieringa 1999: 259]。彼はそれ以前、オランダ聖書協会 (Nederlands Bijbelgenootschap) からスラカルタに派遣されたヘーリック (Johan Friedrich Carl Gericke, c. 1800-57) の「助手」を務めてい

たというが、それがいつからかは不明である。ヘーリックは1827年から1847年まで（1839年に休暇でヨーロッパに滞在した他は）スラカルタで聖書の翻訳などに従事していた。1832年ジャワ語学館の設立と同時にここでジャワ語を教えたが、1837年にその任務から離れた〔ENI 1: 782-3〕。クルタプラジャはこれと入れ代わるかのようにジャワ語学館の教師になったことになる。

ラスによれば、クルタプラジャはクリウォン (kliwon) というプリヤイ (priyayi, 貴族) の地位をもっていたので、スラカルタ宮廷に関わる職位、おそらくクラトン (kraton, 王宮) の図書館に入ることのできる役目にあつたと考えられる。ヘーリックが彼を「助手」にしたのは、彼の言語と文学の知識のゆえであることに疑いはなく、ジャワ語と古代ジャワ語研究の大家コーヘン・ストゥアルト (Abraham Benjamin Cohen Stuart, 1825-76) 〔ENI 1: 496-7〕はこの点でクルタプラジャを称賛しているという。しかし、今日クルタプラジャの作品として確認できるのはマニック・マヤ (Manik Maya) とババッド・スンカラ (Babad Sengkala) の2点にとどまるようである〔Pigeaud 1967 3: 273〕。前者は稲作や稲の神に関する神話 (韻文) であり〔Pigeaud 1967 1: 154〕, 後者は一種の歴史年表 (散文) である〔Pigeaud 1967 2: 44〕。両作品とも王立デルフトアカデミーの写本コレクションに収められ、現在はレイデン大学図書館の所蔵である。

ジャワ語学館の教育のために散文テキストが必要だったが、ジャワの文学伝統は圧倒的に韻文であったため、散文テキストは特別に作成しなければならなかった。その中心となったのがウインテルであった。彼がジャワ人協力者とともに編集したジャワ語学習のための『ジャワ語会話』2巻 (Winter 1848) は、語学テキストであると同時にジャワの社会と文化、文学についても貴重な情報源として高く評価されているという。ウインテルはまたジャワ語古典文学作品の簡略散文版をいくつも作成した〔Uhlenbeck

1964: 107]。そうしたもののなかにクルタプラジャによる散文版 BTJ があったのである。

じつはウィンテルはクルタプラジャの作品に満足せず、「改善版ババッド (Verbeterde Babad)」を作成した。文体上の誤りが少ないことと1721—22年ころまでではなく1743年まで扱っているという違いがあるという。しかしメインスマはこの「改善版ババッド」を参照して修正を施しつつも、刊行したのはクルタプラジャのものであった。

クルタプラジャとウィンテルがともに依拠した韻文版の手写本があったと推測されるが、それはまだ特定されていないようである。バライプスタカ版とメインスマ版の元テキストが異なることはまず確実である。その一つの小さな根拠をあげると、第29章でバジャンのスルタンの即位名アディウィジャヤ (Adiwijaya) が記されるが、メインスマ版はアウィジャヤ (Awijaya) と誤っている [Ras 1987a: 68; Ras 1987b: 70] のに対して、バライプスタカ版はこの即位名を記さない (第32詩章第81詩節, 第4分冊71頁)。この即位名がアディウィジャヤであることは BTJ 以外の諸文献から明らかであり、テーウ作成の索引もアウィジャヤをアディウィジャヤの間違いとしている。

(4) メインスマ版の5つの版

メインスマ版の初版は2巻で刊行された。第1巻 (1874) はジャワ文字ジャワ語による本文である。筆者はこの第1巻の PDF 版をレイデン大学図書館の一般公開のオンラインで入手することができた (2016年7月17日)³⁾。頁づけの最終は688頁なので、かなり分厚い本である。なお、ウェブサイト Sastra Jawa に第1巻のローマ字翻字 (全688頁) が掲上されている。

第2巻 (1877) はオランダ語による序文と註釈、地名リストなどであり、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の蔵書を利用できた。こ

の第2巻は再版されることなく現在に至っていて、序文や地名リストは第5版でカバーできるが、註釈はとくに貴重である〔Ras 1987b: X 参照〕。

第2版（1884-99）は本文が2巻で刊行された。第1巻はたまたま筆者個人が所有する。本文は2-335頁、つまり全334頁である。第2巻の刊行が1899年まで15年も遅れたのは、ジョクジャカルタのソノブドヨ（Sonobudoyo）博物館図書館で読んだその序文によれば、メインスマの逝去（1886）その他諸々の事情によるという。

第3版（1903）はやはり本文が2巻で、同じ年に刊行された。なお、第2版第2巻と第3版の編者は、1877年からレイデン大学でジャワ語・ジャワ文学の教授を務めたフレエデ（A. C. Vreede, 1840-1908）〔ENI 4: 636〕である。

第4版（1941）は同じく2巻ではあるが、オルトフ（W. L. Olthof, 1886-1954）によるローマ字転写およびオランダ語訳である。筆者が翻訳に際して依拠した第5版（1987）は第4版の写真版による再版であり、ラスが長い解説を書き、略年表などの参考資料およびテウ（A. Teeuw, 1921-2012）が別途作成していた第4版にもとづく索引が付されている。この第2巻に付されたラスの解説は65頁にもわたる詳細なものである。なお、第4版と第5版は本稿における便宜的な呼び方であって、各々に第4版、第5版と記されているわけではない。第5版には1941年初版（Eerste druk 1941）と書かれていて、当然ながらジャワ文字による第3版までと異なる出版物の扱いである。と同時に「元の書名：これは予言者アダムから1647年までのババッド・タナ・ジャウイの書である（Oorspronkelijke titel: Poenika Serat Babad Tanah Djawi wiwit saking Nabi Adam doemoegi ing taoen 1647）」と書かれていて、メインスマ版を継承することが示されている。すなわち、メインスマ版の書名にはじつは、BTJと並んでPoenika（これ、この）で始まる長ったらしいものもあったのである。言い換える

と、あまたのBTJのどの版か特定するためにはメインスマ版と呼ぶかこの長い書名を記すことが必要になる。なお、1647年はジャワ暦によるもので西暦では1721-22年である。

筆者は第2版第2巻および第3版両巻とも頁数を未確認であるが、第5版から推測できる。第5版のジャワ語版(Ras 1987a)において前半(7-181頁の175頁)が第2版第1巻にあたり、地図3頁をはさんだ後半(184-362頁の178頁)が第2巻に相当するので、第1巻(334頁)とほぼ同分量で約340頁と推測できる。

3. バライプスタカ版

(1) バライプスタカ

バライプスタカ(Balai Pustaka, ジャワ語ではバレプスタカ Balé Pustaka)は、現在は出版を中心とする民間企業であるが、もともとオランダ植民地時代の政府機関であった。1908年その前身である国民図書委員会(Commissie voor de Volkslectuur)が設置された(活動開始は1910年)。当初の中心的な目的は、ようやく緒についた現地住民向け初等教育のために安価な図書を供給することであった。出版市場が未成熟な当時、商業出版では本は高価なので、官営事業が必要だったのである。1911年に図書館業務を起こし図書の貸し出しを始めたのも同じ理由である[ENI 4: 610-2]。

1917年に委員会は恒久的機関となり、オランダ語で国民図書局(Kantoor voor de Volkslectuur)、ムラユ語(インドネシア語)でバライプスタカと称した。その出版事業は①インドネシア各地の言語による古典作品や民話の編集出版、②西洋文学のインドネシア語への翻訳、③新しいインドネシア語文学の出版という3つの分野にわたり、それぞれ大きな業績を残している[Ricklefs 2008: 221; 池端 1999: 310]。

つまり本書はバライプスタカが当然刊行すべきものであるが、それが

1939—41年であった理由は筆者には不明である。本書以前にババッドで始まる題名の書物は少なくとも8点刊行されており、うち2点は早くも1913年である。これらババッドのなかで最も重要なものが本書およびババッド・ギヤンティ (Babad Giyanti) である [Uhlenbeck 1964: 130]。後者は本書と同じマタラム王国の史伝であり、1755年の王国分割に至る過程を扱う (第5節第2項参照)。1937—39年に21分冊 (および第22分冊として索引) で刊行され、一連番号は No. 1259 である。バライプスタカが刊行したその他のババッドのタイトルと刊行年をウーレンベックに依拠して挙げておく [Uhlenbeck 1964: 130]。

Babad Bedahipun karaton nagari Ngayogyakarta (1913)

Babad Mangir (1913)

Babad Panambangan (1918)

Babad Maja lan Babad Nglorog (1935)

Babad Pacitan (1935)

Babad Pathi (1937)

Babad Arungbinangan (1937)

(2) 形態

バライプスタカ版 BTJ は31分冊で刊行された。1939年に4冊、1940年に19冊、1941年に8冊である。バライプスタカの出版物には刊行順に一連番号が付されており、本書は No. 1298 である。第1分冊の No. 1298 に続いて、第2分冊から No. 1298a, No. 1298b などとアルファベットが付加される。第27分冊の No. 1298z に続いて第28分冊は No. 1298aa となり、最後は No. 1298dd である。

1980年代まで古書店で本書全冊セットの入手は容易であったと聞かすが、現在では端本ですらほとんど不可能である。筆者が2009年滞在中のジョクジャカルタで搜した時には、全冊所蔵する機関は私立学校タマンシスワ

(Taman Siswa) の博物館内図書室だけであった。複写の便宜をはかっていただいた同図書室に感謝申し上げます。

最後の第31分冊が78頁である他はすべて80頁である。第1頁は中表紙、第2頁はその裏(白紙)、第3頁から本文が始まる。最後の頁に目次がある。目次はたいてい1頁なので本文は77頁であるが、目次が2頁の場合もあり、この時は本文が76頁になる。第1分冊には3頁分の序文があるので本文は第7頁から始まる(第6頁は白紙)。判型はA5判であり、1頁に22行納める。

なお、ウェブサイト Sastra Jawa に全31分冊全文のローマ字翻字が掲上されている。

(3) バライプスタカ版序文

以下は第1分冊掲載の序文(ジャワ文字・ジャワ語散文)の翻訳である。出版意図を示すものとしてここに載録する。ただし、後に述べるように底本に関して修正が必要である。

BTJの書はあまた存在する。すでに公刊されたもの、まだ印刷されていないもの、あるいは刊行されることのないものなど様々である。老人のもとに保存されているものが見つかるが、それは今は亡き祖先が子孫に伝えようとしたものである。祖先がBTJの書を保持したのは、初めは、他の人が所有するババッドの書を複写することから始まった。同じように所有したい者によって複写は複写をよび、これが繰り返され現状のような多数に至った。

同じように模倣や複写をして自ら保持する目的は、初めは単に自分自身の読み物とするため、あるいは子孫の読み物とするためだった。したがって、自分の願いや好みに適うものを手本に選んだままであり、ある箇所が間違っていると思ったら修正し、足りないと思っ

たら増やすといったことが行われた。

それゆえ現在 BTJ の書がたいへん多様であるのは異とするにたりない。他人のものとほとんど別の作品だと断言できることさえある。どれが元来のものか知るのはとても困難である。本来のものを容易に選り出すには、できるだけ古いものを捜すのがよい。外観の古いものほど中身の変化が多くない。古いものを選ぶという基準を立てた後に、起源となる場所を捜すことができるとすれば、それはジャワのクラトン（王宮）である。BTJ の成立する場所は間違いなくクラトンなのだから。クラトンのなかでも、より古いスラカルタのクラトンが、元の姿のままでないとしても、それからそう遠く隔たっていない BTJ の書の所在する場所と推測される。

たまたまわかったことだが、ススフナン・パクブワナ 7 世陛下からオランダ国に贈呈された本書がレイデンの図書館に貸し出されていて、さらにその複写がすでにジョクジャカルタに、すなわちピジョー博士の図書室に存在する。

これをバライプスタカが見つけたし、ここに刊行するものである。

他のババッドやすでに刊行された BTJ と比べると、単に相違があるというだけでなく、古さにおいて勝っていて、叙述の仕方はその分より適切であり、緊張感があり、調和がとれている。まったく緩みがないといっても、善や美とみなされる事態の進行や状態を語るにおいては綿密であり、あるいはまた語りに不足はない。

かくして、バライプスタカがここに BTJ を世に出すにあたっての願いは、ジャワ民族の読み物と知識を増やすだけでなく、当然保全すべき古き宮廷詩人の残したものを大切に保存することである。

願わくば、このバライプスタカの目的が達成されんことを。

バライプスタカ

バライプスタカ版が他のババッドや既刊の BTJ よりも優れていると自賛しているが、ここにいう他のババッドはバライプスタカ自身が刊行したいくつかの作品を指し、既刊の BTJ はメインスマ版を指しているのであろう。筆者には他のババッドと比較する準備がないが、メインスマ版との比較ではバライプスタカ版の真正性が高いことは自明である。

(4) 底本

バライプスタカ版の序文は底本を、スラカルタ王国のパクブワナ 7 世 (Pakubuwana VII, 位 1830-58) がオランダ国に寄贈し、レイデン大学に貸し出されたものの複写であり、ジョクジャカルタ在住のピジョー博士の図書室にあったと述べる。ところが、この説明は後のピジョー自身の解説と大きく食い違っている。

ピジョー (Th. G. Th. Pigeaud, 1899-1988) は周知のようにジャワ語とジャワ文献学の大家である。彼はレイデン大学で1924年古代ジャワ語散文作品『タントウ・パングララン (Tantu Panggelaran)』の研究により博士号をえると、同年から1948年までジャワ (おもにスラカルタとジョクジャカルタ) に言語官などとして勤務していたので、バライプスタカ版に関わった可能性はある。しかし、彼が実際バライプスタカ版に関わったかどうか、筆者には不明である。

ピジョーは1948年オランダに帰国した後、KITLV (Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde 王立言語地理民族学研究所) において主にジャワ文献学の調査研究に従事した。彼の代表作の一つ『ジャワの文献』3巻は、レイデン大学はじめオランダの諸機関が所蔵するジャワの手写本の詳細な目録および解題であり、ジャワ (と周辺地域) の文学と文献の歴史に関する基本文献である。その中で当然バライプスタカ版のもとになった写本 LOr 1786 も扱われていて、次のように説明されている [Pigeaud 1967 2: 25]。

ババッド・タナ・ジャウイ研究序説

これは大ババッドと通称されるものであり、ウィンテルの監督下にスラカルタで書かれたジャワ文字の写本であって、18巻からなる。ウィンテルがデルフトに提供し、1864年にレイデン大学に移管され、レイデン大学では LOr 1786 という整理番号が与えられた。

LOr はレイデン大学図書館東洋手写本 (Leiden University Library Oriental Manuscript) のことであり、LOr 1786 はレイデン大学のいわゆるデルフト・コレクションの劈頭を飾るものである。

ところが、ピジョーによれば、バライプスタカ版の底本はこの大ババッド自体ではなく、レイデンにおいてスギアルト (J. Soegiarto) によってローマ字に転写されたコピーである。このローマ字版のコピーはレイデン大学では BCB portfolio 30-34 という整理記号番号が与えられている。手書きではなくタイプ打ちである [cf. Wieringa 1999: 245]。スギアルトは、ピジョーによれば、1930年からレイデン大学のジャワ語の教授ベルフ (C. C. Berg), ドレウェス (G. W. J. Drewes), ウーレンバック (E. M. Uhlenbeck) の助手を務め、多数のジャワ語写本のローマ字転写とオランダ語の梗概を作成している [Pigeaud 1967 2: 11]。

すなわち、バライプスタカ版の序文には次の2点で留保が必要である。大ババッドにバクブワナ7世は深い関わりがあり——まさにこの王のために作成された宮廷詩である——、この写本がデルフトに提供された時期はその在位年代とほぼ重なるとしても、この王はレイデン大学の写本 LOr 1786 に直接の関わりはない⁴⁾。第二に、底本は大ババッドのローマ字化された写本であり、バライプスタカはこれを再度ジャワ文字に転写して刊行したことになる。

このジャワ文字への再転写がレイデンで行われたとは考えにくい。それくらいなら、レイデンでジャワ文字版 (LOr 1786) から直接複写するの

が合理的である。バライプスタカ版の序文がいうように、底本がジョクジャカルタのピジョー博士の図書室にあったとすれば、それはスギアルト版の複写だったことになる。

かくして、原本からバライプスタカ版までの間に次の過程があったことになる。①原本⇒②ウィンテル監督下の写本 (LOr 1786) ⇒③スギアルトのローマ字版 (BCB portfolio 30-34) ⇒④スギアルト版の複写⇒⑤バライプスタカ版。

スギアルト版の複写が作成された経緯（もともとカーボンコピーが作られたのか、後日複写されたのかなど）は筆者には不明である。またバライプスタカが依拠したスギアルト版複写の現在の所在も不明である。なお、ピジョーによれば、スギアルト版は全3754頁におよぶ浩瀚なもので、5つの書類ケース (BCB portfolio 30-34) に納められていたが、その書類ケース30番は所在不明 (missing) である [Pigeaud 1967 2: 166, 795]。

(5) 章区分

すでに述べたとおり、本書にはもともと章立ては存在しない。バライプスタカが編集に際して全体を192章に区分し、各々に題目をつけたのである。各分冊の最後の頁の目次に、章の番号と題目そして頁が示される。ただし、その編集者が誰なのか、またどのような原則で区分し題目をつけたのか不明である。

メインスマ版が扱うのは192章のうち124章までである。第5版では、編者のラスが124章までのジャワ語の題目一覧を示す [Ras 1987a: VII-X] ほか、それらのオランダ語訳、バライプスタカ版における詩章詩節の区切り、各詩章の韻律の名前、メインスマ版の頁を一覧にしている [Ras 1987b: LV-LXIII]。そして本文の左右の余白に詩章詩節の番号が記されていて、これを手がかりに章区分を確認しながら読むことができる。

章立ては読者にとってたいへん便利である。不可欠といってもよいだろう

う。しかし、各章の長さが区々である他、区切り方や題目のつけ方について、問題を感じないわけではない。一例をあげるなら、第35章はかなり長いだけでなく、本筋から外れたラデン・パベランの物語を長々と語った後に、パベランの父の奪還などを経て、本書のクライマックスの一つというべきプランバナンの戦いに至る。戦いの場面は章をまたいで第36章の第一段落まで続いている。またプランバナンの語は章の題目に現れない。

4. 大ババッド・グループ

総体として大ババッドと同じ物語展開を見せる作品群を大ババッド・グループとよんで、以下にその概要を紹介する。

(1) 大ババッド

大ババッドは宮廷詩人ヤサディプラ 2 世 (Yasadipura II, 1756-1844)⁵⁾ がスラカルタ王国のパクブワナ 7 世の命により編んだものであり、1836年に完成した。原本はスラカルタの王宮に保存されているとのことであるが [Ras 1987b: XIV], フロリダ作成のスラカルタ王宮の写本目録 (Florida 1993) には見だしえず、筆者は原本の現状について情報をもたない。

ヤサディプラ 2 世はヤサディプラ 1 世 (1729-1803) の子であり、ランガワルシタ (Ranggawarsita, 1802-73) の祖父である。3 人とも宮廷詩人であり、時代を代表する文学者であった。なかでもヤサディプラ 2 世はサストラ・ヌガラ (Sastra Negara) つまり国家文学者という高い称号を与えられていた。宮廷詩人は引き継いだ作品を書き次ぐことがあり、その際、旧版に単に書き足すのではなく、旧版の叙述に手を加えるのが普通であったらしい。したがって、旧版が見つからない場合は、古い部分ほど誰の手になるのか弁別が困難である。本書でも 1 世の記述と 2 世のそれを区別するのは難しいという (第 5 節第 2 項参照)。

このヤサディプラ 2 世の原本からウィンテルの監督下でスラカルタにお

いて写本が作成された。美しい王宮書体だという [Pigeaud 1967 2: 25]。この写本がデルフトに送られた時点は、1836年からウィンテルが死去する1859年の間という以上には特定できない [Ras 1987b: XV]。1864年にデルフトの東インド課程がレイデン大学に移管されたときに、ウィンテルがデルフトに提供した資料もレイデン大学図書館に移管され、この写本に LOr 1786 という整理番号が与えられたことはすでに述べたとおりである。

(2) 大ババッドとメインスマ版の比較

大ババッドは本来の宮廷詩であり、メインスマ版は教材用の散文である。内容的には前者は1770年ころまでを扱い [Pigeaud 1967 2: 25]、後者は1721年ころまでを扱う。またバライプスタカ版は1743年ころまでである。メインスマ版が扱う1721年ころまでは、大ババッドではバライプスタカ版の第20分冊61頁までにあたるが、その分量はメインスマ版の2倍近い [Ras 1987b: XV]。両者とも英語訳はまだないが、メインスマ版には既述のようにオランダ語訳が存在し、広く読まれている。

こうした外面的な違いだけでなく、テキストの内的な違いがある。第一に両者の物語の流れが大きく前後することがある。このことは、ラスがメインスマ版の各頁の左右余白に付加した詩章詩節の番号をたどると、順序よく推移せず行きつ戻りつする部分があることによって確認できる。その大規模な例は、第83章（第111詩章第10詩節から第113詩章第7詩節、原文の235-7頁、オランダ語訳の241-4頁）が第90章と第91章の間に位置することである。また第92章において（原文の242-7頁、オランダ語訳の249-253頁）第120詩章のなかの詩節の並べ替えがかなり頻繁におこなわれている。こうした叙述順序の不一致は後半で目立つが、このことの意味は筆者にはよくわからない。

第二に、出来事の説明の仕方が異なる。ラスは、叛乱の中心人物トルナジャヤ (Trunajaya) の処刑に対するマンクラット 2 世の関わり方がバラ

イプスタカ版とメインスマ版で大きく異なることを論じている。ここでは紹介する余裕がないが、ラスはその上で、メインスマ版が依拠した韻文テキストが大ババッドより古い可能性を示唆している [Ras 1987b: XV-XVII]。

ラスはまたメインスマ版にはバライプスタカ版にない詳細が記されることがあるという。この点ではすでに述べたように（第2節第3項末尾）パジャンのスルタン、アディウイジャヤの名前がバライプスタカ版に記されていない。ラスはさらに本書にしばしばみられる予言のうち、バライプスタカ版とメインスマ版で取りあげ方が異なる場合をあげているが [Ras 1987b: XVIII-XIX]，ここでは省略する。

このように、大ババッド以外に、メインスマ版の元になった韻文テキストが存在したことは明らかであり、そのテキストの方が大ババッドより古いかもしれないのである。残念ながらその所在は不明である。

(3) バクアラム版 BTJ (NBS 216)

ラスによれば、以上の他にも大ババッド・グループに属するテキストがいくつかある [Ras 1987b: XIX-XXI]。その中でもとくに重要な4点を取りあげておきたい。

第一に、レイデン大学図書館で NBS 216 という整理番号をもつ BTJ である。NBS はオランダ聖書協会 (Netherlands Bible Society, オランダ語名 Nederlands Bijbelgenootschap) であり、同協会の文書がレイデン大学図書館に寄託されていて、ピジョーの『ジャワの文献』にはそのうちの約 160点を取りあげられている [Pigeaud 1967 2: 712-755]。NBS 216 はジョクジャカルタ書体のジャワ文字による散文版であり、2巻からなる。第1巻 (1528頁) はパジャジャランの建国に始まりパクブワナ1世 (位1703-19) まで、第2巻 (490頁) はその後のカルタスラ、スラカルタ、ジョクジャカルタの歴史であり、イギリス支配期 (1811-16) におけるバクアラム王家の設立 (1813) までを扱い、未完である [Pigeaud 1967 2: 750; Ras

1987b: XIX-XX]。スギアルトによるローマ字版およびオランダ語による梗概が作成されていて、これにはレイデン大学図書館の LOr 10.726 という整理番号が与えられている。第1巻は500頁、第2巻は327頁である [Pigeaud 1967 2: 660]。始まり方が大ババッドとちがってパジャジャラン建国からであり、ワトゥグヌン王の物語（第2章）は含まれず、シユン・ワナラの物語（第4章）は含まれるという。

(4) スラカルタの2写本

同じ始まり方をする作品がスラカルタの王家にも存在することが明らかにされている。ラドヤ・プスタカ (Radya Pustaka) 博物館の RP 128, マンクヌゴロ王家図書館の RPB 36 である [Ras 1987b: XX]。そのインドネシア語訳が公刊されている。すなわちスイト訳 BTJ であり、同書の解題によれば、RP 128 を底本とする。RP 128 と RPB 36 はまったく同文であり、1909年作成の RP 128 の方が古い [Soewito 1979: 14-15]。このスイト訳が扱うのは武将カニテン（第41章）までである。

(5) ジョクジャカルタ版ババッド・クラトン

諸写本の詳細な比較に基づく文献学的な研究がなされるのであるが、こうした研究は遅くとも1970年代にはリックレフス (Ricklefs 1972; 1979) やデイ (Day 1978) などによって始まっている。その際リックレフスがとくに注目したのが大英博物館所蔵のババッド・クラトン (Babad Kraton) であり (Add. MS. 12320), あわせて断片的ではあるがインド館 (India Office) 図書館の手写本である (IOL Jav. 36 A)。ババッド・クラトンは、1777年にジョクジャカルタ王宮において完成したもので、完全な BTJ としては最も古い写本であるという。すなわちその内容はアダムから始まりカルタスラの陥落 (1743) に至るものであり、バライプスタカ版の全部 (全31分冊) および大ババッドの第1-234詩章と総体として一致するという [Ras 1987b: XX]。ローマ字転写版 (Pantja Sunjata 1992) が刊

行されている。

(6) サジャラ・ラジャ・ジャワ

ラスはババッド・クラトンより古いものとしてサジャラ・ラジャ・ジャワ (Sajara Raja Jawa) をあげている。翻訳官ホルデイン (Gordijn) が翻訳し、その冒頭部分をイペーレンが刊行したという (Iperen 1779)。その原本はホルデインがスラカルタにおける彼の先生ストラパナ (Sutrapana) から1750年に購入したものだが、現在は所在不明である。ホルデインはキヤイ・アゲン・セラ (第24章) まで翻訳したが刊行されたのはウダラのクディリ太守任命 (第9章) までである。ラスによれば、刊行された部分について検討すると、この作品と大ババッド、メインスマ版、ババッド・クラトンの4者の物語展開は驚くべき一致を示していて、したがって1750年にはこれら大ババッド・グループの共通の祖形というべきものが存在したことになる [Ras 1987b: XX-XXI]。

5. 大ババッドの構成と規模

最後に大ババッド、バライプスタカ版、メインスマ版の構成とくに叙述の終わりと量的な側面について述べておきたい。

(1) 大ババッド

ヤサディプラ2世の原本の忠実な複写と考えられる写本 LOr 1786 について、ピジョーは内容的には1770年ころまで、分量としては全18巻という [Pigeaud 1967 2: 25]。ピジョーが列挙する18巻の頁数は336頁から680頁までまちまちであるが、これらを合計すると9094頁にもなる。たいへん浩瀚な書物である。これだけ膨大な量であると、宮廷詩人が朗誦するものとはいっても、記憶できるものではなく、書き留める必要がある。その意味でBTJは口承というより書承文学というべきであろう。

大ババッドは内容的には次表のような7部に区分される。右側の数字は

各々のバライプスタカ版の頁数および全体に占める比率である。未刊の第7部については概数である。

表 大ババッドの構成と頁数〔Ras 1987b: XXVII〕

	内 容	頁数	%
第1部	バジャジャランの滅亡まで	50	1.0
第2部	マジヤバヒトの滅亡まで	113	2.1
第3部	ドゥマックの滅亡まで	70	1.3
第4部	パジャンの滅亡まで	151	2.9
第5部	マタラムの滅亡まで	496	8.8
第6部	カルタスラの滅亡まで	1484	28.2
第7部	ババッド・マンクブメン	約 2900	55.1
合計		約 5263	100

第1-6部は第1節で紹介したように、各々ババッドを冠してババッド・バジャジャラン～ババッド・カルタスラなどとよぶことが多い。第7部というババッド・マンクブメン (Mangkubumen) はマンクブミ (Mangkubumi) 物語というほどの意味である。マンクブミはパクブワナ2世 (位1726-49) の弟であり、同3世 (位1749-88) の叔父であって、第3次継承戦争 (1746-57) の一方の中心人物である。1755年に王国を2分してジョクジャカルタ王国を建てるとハムンクブワナ (1世) (Hamengkubuwana, 位1755-92) と称した。この部分をババッド・マンクブメンとよぶことは、ジョクジャカルタ王国建国者をスラカルタ時代の名でよんでいることになる。

18世紀前半は内戦の時代であった。第1次継承戦争 (1704-08)、第2次継承戦争 (1717-23) に続く、1740年に始まった内戦 (中国人戦争と通称される) は1743年に一応終結した (叛乱側の主要人物マンクブミも王宮に戻る)。しかし1746年新都スラカルタへの遷都後まもなく第3次継承戦争 (1746-57) が始まり、王国は2分割される。この戦争のもう一人の主

要人物マス・サイド (Mas Said) は1757年スラカルタ王家から分家してマ
ンクヌガラ (Mankunegara) 王家の始祖になった。こうして内戦の半世紀
が終わると、その後イギリス中間統治期 (1811-16) まで半世紀、戦乱の
ない時代が訪れた。

大ババッドの第7部は新都スラカルタへの移動からマンクブミの蜂起、
ギヤンティ条約による王国の2分割 (1755) を経て1770年ころまでの出来
事を述べる。大ババッドはパクブワナ3世の末年 (1788) やマンクブミの
末年 (1792) まで (あるいはさらにジャワ戦争終結の1830年まで) 述べる
のではなく1770年ころで終わっている。この中途半端な感のある終わり方
をする理由はよくわからない。ラスも明快な説明をしていない [Ras
1987b: XXV]。

(2) バライプスタカ版

バライプスタカ版は第6部、ソロ村に新しい王都スラカルタが建設され
る1743年ころまでで終わっている。バライプスタカ版がここで終わるのは
ババッド・ギヤンティと関わりがあり、第31分冊本文末尾に「ババッド・
ギヤンティ第1冊に続く」と記されている。ババッド・ギヤンティはヤサ
ディブラ1世の作品であり、第3節で触れたように、バライプスタカはこ
の作品をBTJに先んじて1937-39年に刊行している。すなわち、ヤサディ
ブラ1世は1743年ころまでをBTJとして括り、これに続く1757年の内乱
収束までをババッド・ギヤンティとして書いたのであった。

ラスは大ババッドの第26詩章第63-71詩節の分析に基づいて、ヤサディ
ブラ1世版のBTJが完成したのは1788年であることを示している [Ras
1987b: XXII-XXV]。ババッド・ギヤンティの成立年はわからないが、ヤ
サディブラ1世から両作品の写本を継承した2世が両者を踏まえて1770年
ころまで書き継いだのが大ババッドであった。ラスによれば、ババッド・
ギヤンティのテキストと当該部分のババッド・マンクブメンのテキストは

まったく異なるという [Ras 1987b: XXV]。すなわち、バライプスタカは、ヤサディプラ 1 世のババッド・ギヤンティにつづいて、2 世の BTJ のうちババッド・ギヤンティ以前の部分を刊行したのであった。

(3) メインスマ版

メインスマ版は1721-22年ころまでを扱うが、これは第2次継承戦争が決着を見る前であり、筆者にはここで終わる理由はわからない。ラスによればバライプスタカ版第20分冊の61頁までに相当するということだが [Ras 1987b: XV]、メインスマ版の終章である第124章はバライプスタカ版第20分冊の57-66頁なので、章の途中で終わっているようにみえる。さらにはウィンテルによる改善版ババッド (第2節参照) は1743年10月まで扱っているというので [Ras 1987b: XI-XII]、メインスマの手元には第6部の終りまで原稿が存在したのである。

メインスマ版が1722年ころで終わったのは、1743年まで扱うと大部になりすぎるためかもしれない。上の表にあるように第6部まで合計するとバライプスタカ版は2364頁になる。このうち、ラスによれば、メインスマ版の1722年ころまでに相当するのは1496頁である [Ras 1987b: XV]。その差の868頁を加えることは58%の増加を意味する。既述のように (第2節第4項) メインスマ版の初版は688頁とかなり分厚かった。第2版、第3版が2巻に分けたのは理由のないことではないのである。これに58%を加えると1088頁になる。第2版、第3版なら、やや厚めの第3巻が必要ということになる。なお、同じく既述のように、第2版と第3版の両巻 (第5版の前半と後半) はほぼ同分量なので、これを分かち基準は内容ではなく分量であったように思われる。第5版の前半は第76章 (第100詩章末) まで扱い、後半は第77章 (第101詩章) からであるが、第75章 (第100詩章初め) から第6部に入っていて、分割の基準が内容にあるとは考えにくいのである。

(4) 不均等

バライプスタカ版は大ババッドの45%であり、刊行されなかった部分の方が多い。

メインスマ版が扱うのは大ババッドの28%に相当し、筆者の日本語訳(全10回)はババッド・マタラムまでなので17%に相当するにすぎない。

上の表から明らかなように、第1-7部の各部の長さは不均等である。しかも、第5部はそれ以前の第1-4部の合計384頁よりかなり多い。第6部は第1-5部の合計880頁よりはるかに多い。そして第7部は第1-6部の合計2364頁よりかなり多い。つまりBTJは王都の移動にしたがって7つに区分した場合、新しい時代ほどいちじるしく分量が多くなる。第4部までは第5部の前史、第5部までは第6部の前史、第6部までは第7部の前史であるかのような扱い方といえるかもしれない。

お わ り に

ジャワの文学や文化の資料として、また歴史の史料としてBTJを取りあげるとき、バライプスタカ版を中心に用いるのが適切である。ヤサディブラ2世のいわゆる大ババッドを忠実に反映すると考えられるからである。メインスマ版が依拠した元テキストが大ババッドとは異なるので、メインスマ版も参照する価値がある。これらはババッド・ギヤンティも含めて、言わばスラカルタ版BTJであるが、その他にジョクジャカルタ版BTJと言うべきババッド・クラトンやパクアラム版BTJ(NBS 216)も同じ大ババッド・グループのものとして重要である。

付説1 天女ナワンウランのその後

BTJの解説から離れて、天女ナワンウランのその後および南海の女王との関わりを語る伝説を紹介しておきたい。

ババッド・マジヤパイトの第12章「ジャカ・タルブ」において天女デウィ・ナワンウランは夫ジャカ・タルブと赤子のララ・ナワンシを残して天に戻っていくという、わが国の羽衣伝説によく似た話が語られた。残された娘ララ・ナワンシの行く末がババッド・ドゥマックの第17章「ラデン・ボンダン・クジャワンがララ・ナワンシと結婚」で明らかにされる。すなわち彼女は、ブラウイジャヤ王とワンダンの女の間の子ラデン・ボンダン・クジャワン（ルンプ・プトゥンと改名）と結婚し、この結婚から生まれたキ・グタス・パンダワの長子が第24章の主人公キ・アゲン・セラである。このキ・アゲン・セラの孫にパマナハンおよびジュルマルタニがおり、前者がやがて初代のマタラム太守になり、その子セナパティがジャワにおける覇権の樹立に向かうことになる。ジュルマルタニがパマナハンとセナパティ父子を補佐する。このように天女ナワンウランの物語はBTJのなかで単なる挿話ではなく、マタラム王家の系譜の中に位置づけられているのである。

天に昇ったナワンウランのその後についてBTJは何も述べていない。BTJにとって重要なのはその娘ララ・ナワンシの子孫の系譜であるから、その意味でナワンウランのその後を語らないのは当然である。しかしBTJとは別に、その後のナワンウランの運命を語る伝承がある。その中でナワンウランは、BTJ第32章に登場する南海の女王ニヤイ・ララ・キドゥルに関係づけられている。南海の女王の内大臣と外大臣の由来に関する伝承の概略をここで紹介しておきたい [Argo 2006: 94-96]。

天界に戻ったナワンウランは不幸なことにそこに住まうのが許されなかった。地上で長く人間だったのが咎められたのである。結局神々は彼女に南海の支配者に仕えるよう申し渡した。南海に至ると、出仕の申し出が受け入れられ、ニヤイ・リヨ・キドゥル (Nyai Riyo Kidul) の名を与えられ内大臣 (patih lebet) に任じられた。

ババッド・タナ・ジャウイ研究序説

この物語の紹介者アルゴによれば、中部ジャワ南部のクタウィナングン (Kutawinangun) 地方のブルピトゥ (Bulupitu) に、デウィ・アユ・ナワンウランの聖遺址 (Petilasan Dewi Ayu Nawangwulan) なるものがある。ジャワ人が参詣に訪れるという。筆者は2013年3月そこを訪れた。ジョクジャカルタ市の西80キロに位置するクタウィナングンの町の北西3-4キロに緩やかなブルピトゥ丘がある。その参道を上がると頂上にナワンウランを中心に3基のイスラム式の墓があり、日取りによっては参詣・参籠者が多いとのことだった。

この伝承だけではニヤイ・ララ・キドゥルとの関わりは必ずしも明確でないが、内大臣と対をなすであろう外大臣 (patih jawi) の物語によって明らかになる。いささかややこしいのは、BTJ 第32章の南海の女王ニヤイ・ララ・キドゥルはここではカンジェン・ラトゥ・キドゥルの名で登場し、ニヤイ・ララ・キドゥルはその配下の外大臣の名前である。

むかしカンジェン・ラトゥ・キドゥルが南海の支配者になる以前、そこにはすでに王がいて、羅刹女の姿で南海の精霊を支配していた。その後この超能力ある女王は、並外れた超能力をもつカンジェン・ラトゥ・キドゥルに負かされた。カンジェン・ラトゥ・キドゥルはその後南海の女王となりジャワ全土の精霊を支配した。負かされた女王はその外大臣に任じられ、ニヤイ・ララ・キドゥルの名前で南海の精霊の戦士たちを統率し従える任務を与えられた。

ニヤイ・ララ・キドゥル (カンジェン・ラトゥ・キドゥル) に関しては多数の神話伝説があり [ENI 2: 535; 中島 1993参照]、そのあるものがBTJに取り込まれて王家の正統性の演出に貢献していることがわかる。

なお、百瀬侑子の近著はインドネシア各地の羽衣説話と類型を提示しつ

つ、インドネシアの羽衣民話の源流の可能性を中国やインドに求め、日本の場合にも論及する〔百瀬 2013: 186-205〕。説話の研究としてたいへん参考になる。ただし、天女のその後にまで筆は及んでいない。

付説2 いとこ婚

セナパティが着手したマタラムによるジャワの統一は、スルタン・アグンに至って完成する。統一事業は武力による制圧一辺倒ではなく、本領安堵などの懐柔策のほか、様々な術策、政略が用いられる。政略結婚は常套手段だが、とくにスルタン・アグンがスラバヤの王子プキックに妹バンダン・サリを与えたのは重要である。この夫婦の間に生まれた娘はスルタン・アグンの長男であるマンクラット1世（位1646-77）の妃となる。いとこ婚であるが、この結婚から生まれた子がマンクラット2世（位1677-1703）になる。第58章でスルタン・アグンがプキックに語った次のような言葉はこのような未来を予言しているのである。

たとえて言えば余が泉でそなたは池、あるいは余が中身でそなたが入れ物である。つまりじゃ、そなたが余とともにジャワ国の王たちの祖となることはすでにアラーの思し召しによる宿命であり、そなたは女の側から、余は男の側から力を合わせるのだ。

マンクラット2世はスルタン・アグンの孫であると同時にプキックの孫である。とすると、スラバヤはセナパティ以来マタラムの征服事業に立ちただかる宿敵であったが、ここにおいて、マタラム王国はじつはスラバヤとの婚姻の上に成立した連合政権でもあることがわかる。このように、いとこ婚はジャワの王権あるいは王権論において重要であるが、マジヤパイト王家内でいとこ婚（母方交叉いとこ婚）がおこなわれていたことは14世紀

については青山亨（1995）、15世紀については深見（2015）をみられたい。
なお、13世紀初めまでジャワの諸王の系譜関係はほとんどの場合に親子関係すら不明である。

謝辞

本稿は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容（2）ジャワのイスラーム化再考」および科研費基盤研究（B）「ジャワ語文献にみるジャワのイスラーム化再考（16H05662）」（代表者：菅原由美大阪大学准教授）の研究成果の一部です。

注

- 1) パララトンについては深見訳（2003c, 2003d, 2003e）参照。この拙訳に際して英訳の存在を知らなかったが、じつは新発見写本に基づく英訳がある（Phalgunadi 1996）。
- 2) マタラム王国の建国年次については諸説あるが、1578年説が有力である〔深見 2011〕。
- 3) 本文の頁づけの最終は688頁であり、つづいて正誤表が4頁付されているのに対して、PDFは全646頁である。つまりPDFには50頁分ほど欠落がある。前半で欠落25箇所計50頁、後半で6箇所計12頁、他方重複が前半に1箇所2頁あることを確認した。
- 4) ウィンテルが作成させた写本は9000頁を越える膨大なものであり（第5節第1項参照）、美しい王宮書体で書かれている（第4節第1項参照）ので、国王のなんらかの支援があった可能性は考えられる。
- 5) ヤサディプラ2世の生年については明記しない資料が多いが、ここではフロリダに従う〔Florida 1993: 372〕。

参 考 文 献

Albada, Rob van and Th. Pigeaud 2014: *Javaans-Nederlands Woordenboek*, 2 Vols., Brill, Leiden/Boston. (Old edition 2007, KITLV Uitgeverij, Leiden.)

- Aminuddin Kasdi 2003: *Perlawanan Penguasa Madura atas Hegemoni Jawa: Relasi Pusat-Daerah pada Periode Akhir Mataram (1726-1745)*, Yogyakarta.
- Argo Twikromo 2006: *Mitologi Kanjeng Ratu Kidul*, Nidia Pustaka, Yogyakarta.
- Brandes, J. L. A. 1920: *Pararaton (Ken Arok) of het Boek der Koningin van Tumapel en van Majapahit*, 's-Gravenhage/Batavia (VBG 62).
- Day, A. 1978: "Babad Kandha, Babad Kraton and Variation in Modern Javanese Literature", *BKI* 134-4: 433-450.
- ENI: *Encyclopaedie van Nederlandsh Oost-Indië*, 8 Vols., Martinus Nijhoff & Brill, 1917-1939.
- Florida, Nancy K. 1993: *Javanese Literature in Surakarta Manuscript, Volume 1: Introduction and Manuscripts of the Karaton Surakarta*, Cornell University, Ithaca, New York.
- Iperen, J. van 1779: "Begin van eene Javaansche Historie, Genaamd Sadjara Radja Djawa", VBG 1: 134-172; 2: 262-288; 3: 117-133.
- Kern, H. 1928: "Taco Roorda", *Verspreide Geschriften*, XV, 's-Gravenhage: 207-216.
- Meinsma, J. J. 1874: *Babad Tanah Jawi in Proza: Javaansche Geschiedenis Loopende tot het Jaar 1647 der Javaansche Jaarteling met Aanteekening van J. J. Meinsma*, 2 Vols. (1874-1877), 's-Gravenhage.
- Pantja Sunjata, Ignatius Supriyanto and J. J. Ras 1992: *Babad Kraton: Sejarah Keraton Jawa sejak Nabi Adam sampai Runtuhnya Mataram Menurut Naskah Tulisan Tangan The British Library, London Add 12320*, Djambatan.
- Phalgunadi, I Gusti Putu 1996: *The Pararaton: A Study of the Southeast Asian Chronicle*, Sundeep, New Delhi.
- Pigeaud, Th. 1938: *Javaans-Nederlands Handwoordenboek*, Groningen & Batavia.
- Pigeaud, Th. G. Th. 1967-1970: *Literature of Java*, 3 Vols., Martinus Nyhoff, The Hague.
- Ras, J. J. ed. 1987a: *Babad Tanah Jawi: De prozaversie van Ngabehi Kertapradja voor het Eerst Uitgegeven door J. J. Meinsma en Getranscribeerd door W. L. Olthof*, Foris.
- Ras, J. J. ed. 1987b: *Babad Tanah Jawi: Javaanse Rijkskroniek: W. L. Olthofs*

- Vertaling van de Prozaversie van J. J. Meinsma Lopenden tot het Jaar 1721*, Foris. Ras, J. J. 1992: *The Shadow of the Ivory Tree: Language, Literatur and History in Nusantara*, Rijksuniversiteit te Leiden (Semaian 6).
- Remmelink, W. 1994: *The Chinese War and the Collapse of the Javanese State, 1725-1743*, Leiden.
- Ricklefs, M. 1972: “A Consideration of Three Versions of the Babad Tabah Jawi”, *BSOAS* 35: 285-315.
- Ricklefs, M. 1979: “The Evolution of Babad Tabah Jawi Texts: In Response to Day”, *BKI* 135-4: 443-454.
- Ricklefs, M. C. 1988: “Babad”, *Encyclopedia of Asian History*, New York and London, I: 119.
- Ricklefs, M. C. 1998: *The Seen and Unseen Worlds in Java 1726-1749: History, Literature and Islam in the Court of Pakubuwana II*, Honolulu.
- Ricklefs, M. C. 2008: *A History of Modern Indonesia since c. 1200*, 4th ed., Palgrave Macmillan, Houndsmills.
- Robson, Stuart and Singgih Wibisono 2002: *Javanese English Dictionary*, Hong Kong.
- Soewito S. 1979: *Babad Tanah Jawi (Galuh Mataram)*, np (Delanggu?).
- Sudibjo tr. 1980: *Babad Tanah Jawi*, Jakarta.
- Sumarsono tr. 2007: *Babad Tanah Jawi: Mulai dari Nabi Adam sampai Tahun 1647*, Yogyakarta. (reprint 2011)
- Uhlenbeck, E. M. 1964: *A Critical Survey of Studies on the Languages of Java and Madura*, 's-Gravenhage.
- Wieringa, E. P. 1999: “An Old Text Brought to Life Again: A Reconsideration of the ‘Final Version’ of the *Babad Tanah Jawi*”, *BKI* 155-2: 244-263.
- Winter, C. F. 1848: *Javaansche Zamenspraken*, 2 Vols., Amsterdam, 1848-58.
- 青山亨 1995 「アルジュナウイジャヤからスタソーマへ」『東洋学報』77 1 & 2: 1-33.
- 青山亨 2004 「南海の女王ラトゥ・キドゥル——一九世紀ジャワにおけるイスラームをめぐる文化的表象のせめぎ合い」『総合文化研究』（東京外国語大学総合文化研究所）8: 35-58.

- 池端雪浦編 1999『東南アジア史2 島嶼部』山川出版社
- 柴田紀男 1991「ババッド」土屋健治他編『インドネシアの事典』同朋舎: 340.
- 中島成久 1993『ロロ・キドゥルの箱——ジャワの性・神話・政治』風響社
- 深見純生 2003a「近世ジャワ宮廷の文化世界」『岩波講座東南アジア史 別巻 東南アジア史研究案内』岩波書店: 63-67.
- 深見純生 2003b「18世紀ジャワ史に関する若干の研究と史料」未刊（見えない
科研報告2003年12月20日
<http://www.h6.dion.ne.jp/~kawan/mienai/20031220FUKAMI-rep.htm>)
- 深見純生訳 2003c「ケン・アンロク伝」『国際文化論集』（桃山学院大学）27:
83-104.
- 深見純生訳 2003d「シンガサリ諸王伝」『国際文化論集』（桃山学院大学）28:
109-127.
- 深見純生訳 2003e「マジャパヒト諸王伝」『国際文化論集』（桃山学院大学）29:
305-324.
- 深見純生 2011「マタラムの建国年次について」『国際文化論集』（桃山学院大
学）44: 29-48.
- 深見純生訳 2012「ババッド・タナ・ジャウイ 1-10」『国際文化論集』（桃山学
院大学）45-49（2012-2014）, 『人間文化研究』（桃山学院大学）1-5（2014-
2016）.
- 深見純生 2015「15世紀のマジャパヒト」『昭和女子大学国際文化研究所紀要』
21: 43-57.
- 深見純生 2017「『ババッド・タナ・ジャウイ』におけるムラピ山——精霊と火
砕流」『桃山学院大学総合研究所紀要』43-1: 101-115.
- 宮坂正昭 1984「『ジャワ年代記』の時空性——分裂王国マタラム宮廷作家の世
界像」『東南アジア研究』22-1: 34-52.
- 百瀬侑子 2013『インドネシア民話の世界——民話をとおして知るインドネシ
ア』つくばね舎